
月に天ぷら

山田スウェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月に天ぷら

【Nコード】

N3326Z

【作者名】

山田スウェル

【あらすじ】

一度は書かされた将来についての作文。思えば僕は野球選手になりたかった。あれから何年か経ち、僕は大人になり初恋の人は自殺した。そして彼女には娘が居たらしい。

思春期、彼女を思い何度か果てたからか、父親が定かでないと言われる少女におかしな父性を覚えてしまう。

まるで、あの日の延長上に生きている少女は僕に言う。

一緒に死んで下さい。

誰でも一度くらい、就きたい職業についての作文を書かされただろう。僕の頃は夢を与えるとと言われる世界に憧れる一方で、手堅く公務員を目指す奴等も多かった。生きていれば今年で31歳になる牧野がなりたかったのも、教師だった。

今日、僕は牧野の飛び降りたホームに居る。同窓会に出席するのを口実に帰ってきたんだ。

思えば二年振りになろうか。彼女の存在を知ってから足は遠のくばかりで、母やチロの死でさえも僕を動かす事はなかった。

ベンチに座ったまま、煙草を吸うでなく、紅茶も飲みやしない僕を、隣の学生が気持ち悪い男だと打っている。その感覚は正しい。

僕は気持ち悪い。

有給休暇を使ってまで、ここに戻るのをミキがそう言った。ミキからしたら墮胎手術は付き添ってくれなかったのに、友達が居ない同窓会へ出席するのが気持ち悪いんだ。確かに。その感覚も正しい。

ただひとつ訂正する。親しい友人が居ないだけ、だ。クラスメイト等と会話を弾ませる自信はある。例えば久しぶりに見た街並みの話をしよう。随分と整備され、駅前通りは賑やかになった。商業科

出身の何人かはそのショッピングセンターで働いているんじゃないか。屋上に繋がれた気球が風に煽られている。

それに母校の制服も変わった様だ。オシャレになったかと聞かれたら微妙なもの、隣の彼のみたいな着こなしは出来ないと思う。だって僕は地味な学生だったから。

ここでやっと煙草をくわえ、ボストンバッグに手を突っ込むとライダーを引きずり出す。とりあえず3日分の下着を放り込んできた。実家では未だに二層式の洗濯機が動いている、なんて都市伝説めいた事を言う父だが、本気で僕が帰ってくるとは考えていない。母が亡くなって、より僕らは距離感を掴めなくなってしまった。

たぶん、父と僕の間には川が流れているのだ。この川は桃は流れて来ないが、サワガニが生息出来るほどキレイな水が流れる。

この話をするミキは露骨に嫌な顔を浮かべ、酔っているのかって聞く。父と僕の間には清流があるなら、僕とミキを隔てるのはアルコール。いつだって酔っているのはミキなのに、納得できない事があれば僕と酒の所為にしてしまう。

と、携帯電話を開けばミキからの着信が数件ある。駅に着いた事、待ち合わせの相手が来ない旨をメールで告げ、それから電源を落とす。

こうしている間、何本か行き交い、男子校生は居なくなり、また知らない誰かが隣に座る。乗り換え路線などない、登りと下りしかない小さな駅だが、何故か下車して座る。見れば、次に隣へ座った少女は椅子の上で体育座りをし、空を仰いでいた。

ホームは簡素な作りで、中央に駅名を書いた看板とベンチ、灰皿

が設置されているのみ。雨風凌ぐ覆いがないのだから、分煙の概念など存在しない。何かと禁煙を強いられる都市部と違い、田舎は相変わらずこうした部分に寛大だ。けれど、こんなにも緩い景色だつて牧野を飛び降りさせるんだ。

「なあなあ、牧野が死んだって」

風がもう一度強く吹いた時、あの日の声が聞こえてきた。待ち人の到着に慌てて顔を上げると、車内の彼は僕の隣を見ており、隣の少女が僕を見ていた。視線が妙な絡まり方をしている。

ちりん、ちりん。少女の鞆に付いた鈴が鳴っている。

——1995年、初夏。僕は高校1年生だった。

実家が鞆屋を営んでおり、商業科がある学校への進学は暗黙の了解。と言うより、うるさく言われてまでやりたい事など無いし、こうして黙って座っているのが賢明なのだ……なんて夏休みを控えた教室内、僕はこんな冷めた構えをしている。それが格好いいと勘違いしているんだ。

牧野ユズは僕と同じくらい目立たない生徒で、担任教師が今日で欠席が3日続いていると言わなければ誰も気に止めなかっただろう。牧野の机にはプリントが溜まり、誰かが見舞いを兼ねて牧野の自宅を訪ねなければならぬらしい。みんな、視線で探り合う。

もちろん、牧野の家に行くのは面倒だ。けれど新任教師に食事を奢らせるのにはいい理由になりそう。

学校に内緒でバイトをしている奴も居るが、放課後の空腹を満たせないのが現実だ。それに担任の相沢は美人で、涼しげな巨元は特に男子生徒に有効だった。

「はい、はいー！ 俺、成海が行きます」

やはり、と言っていていいだろう。彼が名乗りを上げる。

「こら成海くん、遊びに行くんじゃないのよ？」

「やだなー相沢ちゃん、分かってるってば」

窓側の一番後ろから笑い、なま暖かさが僕の背を叩く。振り返るとなるちゃんと目が合い、頷くように促された。

「ほらー渡辺くんだって、頷いてるし」

なるちゃんは行儀悪く机に足を乗せ、椅子を上下に揺らす。そしてクラスメイトは渡辺と指さされた僕を等が確認し、気まずそうな顔を浮かべた。母の再婚は決して悪い事じゃない、ただ再婚相手が良くないだけだ。相沢さえ不安な面持ちで、僕を見る。

「あの良かったら、渡辺くんも一緒にどうかな？ 牧野さんと同じクラブでしょ？」

努めて明るく誘ってきた。

「えー、俺と2人きりで行こうよおー。帰りはラブホに入ろ！ 俺の童貞貰ってよ」

なるちゃんの半分本気な発言が笑いを起こす。すると相沢は叱るでなく、むしろ救われたとばかりに胸を撫で下ろす。

相沢に期待はしていない。とはいえ、裏切られるとは思っていなかった。相沢は熱を持って教育にあたると最初に言った。長い間、教職に就いてきた先輩等には見えなくなっているものがあるはずだから、って言ったんだ。

つまり真っ白であるが故、染まりやすくもある。そういう事。

僕は肯定も否定もない姿勢を作る。頬杖し、文庫本をめくるのだ。

ところで牧野ユズもこの本を読んだのだろうか。

月に2冊読むのが文芸部の活動内容だ。感想文の提出は無く、読了報告さえ不要。僕のような生徒が席を置くのに適している。

「じゃあ、渡辺くん。放課後、職員室まで来て下さいね」

言われたから顔を上げたのに、相沢は目を合わせず出席簿へ俯く。生え際が目立ち始める相沢は女子に美容院を勧められていた。赴任してきて3ヶ月、相沢はまだ街に慣れない様だ。

けれどその3ヶ月で父の事を覚えたのだ。相沢の授業は分かりやすい。試験に必要な不必要が明確で、教科書には必ずラインを引かせる。そして相沢は僕との間にも同じような線を引いたんだろう。

偶然に似た嫌がらせで、開いたページにも線が引かれている。

人殺し

そう、僕の父は人を殺した。

僕の母は道にゴミが落ちていれば拾える女性だ。当たり前だけど、なかなか出来るものじゃない、なんて言われるのが心地良いんだ。だから気付けば記憶にある母は屈んで、透けた後頭部を僕が見下ろしている。

母さん、僕はその姿をいつからか呼び止めなくなった。

僕らとなるちゃんは並んで校門の前に立つ。思えば入学式の時、母となるちゃんのおじさんとで写真を撮った。あれから数ヶ月経ち、僕の背はなるちゃんを追い越して、なるちゃんの赤い髪や着崩した制服をより人事の位置から眺められる。

なるちゃんが僕をどうでもいいように、僕だって幼馴染みがどうだっていいんだ。朝は自転車を引き上げて上ってくるも、帰りは吸い込まれるみたいに消えていく。

なるちゃんは黙ってこの光景を見続けるんだろう。僕も沈黙を保つ。

放課後、相沢を訪ねてみると立て込んでおり、車をこちらへ回すからとだけ言われた。相沢だけじゃなく職員室全体も何やら騒がしかった。もしかしなくても、また誰かが問題を起こしたのだ。2週連続で全校朝礼が行われるのは体に悪い。

熱の籠もる体育館を考えると嫌な汗が背を伝う。母に言わせれば一過性らしいが、僕は他人の臭いに過敏だ。シャンプーや柔軟剤の

香りですえ、吐き気を覚える。実際、戻ってしまった事もあった。

そういう点だと、なるちゃんは無臭なのだ。飾り立てているのに刺激を受けない。なるちゃんの穴が空いた耳から、向かってくる軽自動車が見えた。

「お前、助手席な」

早口で命令される。黙って従い、ドアを開けると相沢は意外そうな顔をした。

「何ですか？」

「あ、ううん。シートベルトはきちんとしてね」

乗車するなり、芳香剤が強烈に臭う。甘いココナッツの香りは相沢には似合わない気がするが、灰皿代わりの空き缶を見付け納得する。

僕の視線を辿り、一旦は隠そうとした相沢だが、諦めたみたいだ。淵にあった吸い殻を押し込むと、ぽちゃん、小さな音がある。

「先生、タバコ吸うんだーカッコいい！」

なるちゃんが茶化す。

「格好良くありません。吸わないでいられるなら、それにこした事はないよ」

「つまりストレスって訳？」

遠慮なくくつろぐ、なるちゃん。靴のまま足を伸ばすと、スイツ

チを押して窓を開ける。相沢はそんな無礼を咎めようと隙間へ乗りだし、僕の目の前が白いブラウスになる。透ける生地で黒の下着がはっきり確認出来た。そして制汗剤の臭いも。

「あ、痛て！ やめてよ先生！」

「ほら靴を脱ぎなさい！」

僕が顔を反らす一方、2人はじゃれ合う。僕はとにかく早く、車の発進を願った。

なるちゃんは叩かれながら笑っているけど、分かっているはずだ。ストレスがあるかと聞いたのに相沢が誤魔化したって。

ひょっとして相沢も嘘をつきたくない弱虫なのかもしれない。

僕は臭いに耐えながら、またほんのちょっと相沢に求めてしまいうだった。

牧野ユズの自宅は学校から10分程度走った所にあるドラッグストアの隣。車はドラッグストアの駐車場に止められ、まず相沢は店先へ向かった。

「あなた達、そんな所にたまらない！　お店の方に迷惑でしょ！」

自動ドア付近ではクラスメイト等がアイス片手に座り込んでいる。相沢の姿を確認するなり側の自転車へ飛び乗り、反省の言葉がないまま去って行った。

相沢から降りないと言われた僕らはその様子を無言で眺める。相沢が居れば会話があるが、2人になるとなるちゃんは何も言わない。ウオークマンを取り出し、歌のない曲を聞き始める。店内に入ってしまった相沢が、見回りがてら店側へ謝罪するとよんだのだろう。目も閉じる、なるちゃん。

僕もサイドミラーから探るのは止め、ウオークマンを出す。ウオークマンは入学祝いに贈られたもので、なるちゃんとお揃いでもあった。

なるちゃんはメロディーだけを好み、歌は邪魔だそうだ。逆に僕はメロディーだけじゃ寂しく聴え、出来るだけ歌詞が理解出来る曲を選ぶ。

今、流しているのはステイックサイダーの新曲で父が買ってくれた。最近、父は僕が好むものを知りたがる。それは僕の好きなものを知っていると母が喜ぶからだ。

くるくる回るカセットが僕の家族に重なる。僕らの気持ちは巻き

込んで膨れ、それからすり減っていく。これを繰り返すだけ。

道中、相沢は牧野ユズが僕に似てると言った。すかさず冴えない部分が共通点だとなるちゃんに突っ込まれたが、首は横に振られた。最初、その仕草は生徒に対し「冴えない」なんて言えないからだと受け取った。けれど会話していくうち、相沢に明確な答えが無いのが分かる。つまり、かぶりを振ったのは分からない、そういう意味だったんだ。

言った本人が分からないなら、どうしようもない。どうしようもないが牧野ユズについて考えたくはなる。

僕の中の牧野は物静かに座っている。挨拶ぐらい交わした事はあるかもしれないものの、声の印象は無い。ただただ静かに腰掛ける映像が頭へ浮かぶ。

それはなるちゃんも同じ様で、彼は名前と顔が一致しないと言う。ユズ、響きは可愛いが想像したら駄目だ。仮に名前負けをしないなら認識しているはずだ。

とは言え、牧野が美少女であってもなくても見舞いは面倒だ。相沢の感じた通り、牧野が僕と似ていれば牧野だって面倒に違いない。それとも僕と同じで教師に黙って従い、その場をやり過ごすのだろうか。波風立てず、表面を撫でる。分かった振りと納得した真似をするんだ。

「お待たせ、行きましょう！」

相沢はやっと帰ってきた。エンジンを止められると、すぐ生温か

さに襲われる。慌てて下車しても駐車場の照り返しが厳しいから、なかなか歩き出せない。

額の上へ手を翳す。正面に園芸用品が並べられている。この暑さの中、農作業をしようなど信じられない。

と、その時。僕の中をすどん、何かが落ちていった。

母は家庭菜園を持っている。もはや趣味の域を出た本格的なもので、お裾分けをすれば菓子や野球の観戦チケットで返ってきたりした。

野球のルールなど知らない両親はメガホン片手に帰宅すると、試合内容を話してくれる。野球選手を目指していた僕に、だ。

夢を諦めたにしろ、チケットがあるなら僕が行きたかった。話を聞くうち不機嫌になる僕を父は殴る、母が止める、結果僕が謝る。

無意識に左頬を押さえていた。なるちゃんがこちらを見て、目が合うと反らされる。相沢はすでに牧野の自宅前に立っており、手招きしている。

「なあ」

歩き出すと、なるちゃんが呟く。

「お前、おじさんに殴られてんの？」

僕は足を止めない。これはなるちゃんの独り言だ。返事をしたら茶化されるに違いないんだ。

いや、殴られているとしたら助けてくれるのか、って叫び出しそう
で答えないだけかもしれない。

一言でいうと牧野の家は気味が悪い。窓という窓が正面の太陽を遮り、風もないのに雨戸は揺れている。

気丈に相沢がインターホンを鳴らす反応は無い。室内に誰か居るのは感じられるものの、そのドアが開かれるのを僕らは望めなかった。

まるで絵に書いたみたいに家庭環境がよろしくない光景だ。相沢は春の家庭訪問の際、何も感じなかったのだろうか。

なるちゃんも同じく思った様で相沢を挟んで目が合う。そして反らされる。

「春にお邪魔した時はこんな風じゃなかったわ」

「こんな風って」

「だって、これが通常？」

なるちゃんだって反射的に茶化したんだ。相沢はそれを食ってかかり、軒先を指さす。庭であろう空間へゴミ袋が高く積まれている。こんな良い天気だが洗濯物は干されていない。錆び付く物干し竿が救いを求める風に伸び、強く吹けば折れてしまいそうだ。

相沢の足が踏み込むか、いなか迷っている。

「せんせ、牧野死んでるかもしれないよー」

「なんて事を言うのよ！」

「だってこんな家、人間なら住めないだろ？」

なるちゃんは真っ先に踵を返していた。僕もそれに続く。気配は
するし、死んではないだろう。この息の殺し方は僕らが去る事を願
う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3326z/>

月に天ぷら

2011年12月19日22時55分発行